

## 暑中お見舞い申し上げます。

夏のご挨拶としてお馴染みのこの言葉が、ひときわ切実な思いを伴って心に響く、今年の夏です。「生命の危険に関わる暑さ」なる言葉も飛び出す中、会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか？

せめてひとときの涼を…と、ドイツ・バイエルンの山中に静かに佇むお城の写真をお届けします。「ノイシュバンシュタイン城」終生ワーグナーの音楽を愛し、援助を惜しまなかったバイエルン国王ルートヴィヒ二世が建てた「夢の城」です。(王様はその後悲劇的な末路を辿ることになりますが、それにはこの城の建設も関わっていたのです。)

9月9日開催の第81回定期演奏会では、前半にこのワーグナーの作品をお届けします。

指揮者の長野力哉先生には、これまでもドイツの作曲家による曲をたくさん指揮していただきましたが、今回はワーグナーと「がっぷり四つ」と言うことで、先生からワーグナーにまつわるお話を伺うことにいたしました。

今までの「インタビュー！」シリーズとは趣を変え、もっとざっくばらんに「対談」形式でお届けしたいと思います。

題して…

マエストロ長野と

ワーグナー談義!!

聞き手：「友の会」事務局 岡田 史子



ー私が「初めて聴いたワーグナーの曲」として覚えているのは、「タンホイザー行進曲」です。小学校の音楽の時間にレコード鑑賞の教材として取り上げられていたのです。立派なステレオ装置でなく、多分ポータブルなレコードプレイヤーだったのではと思いますが、それでも田舎の少女を夢中にさせるのには十分でした(笑)。たった一度聴いただけでも忘れられないほどの魅力がありました。先生の「ファーストワーグナー」の記憶も教えていただけますか？

今回こうしてワーグナーについてお話しする機会をいただいて大変に嬉しいです。僕も、自分の過去のワーグナー体験を思い起こしてみましようか。母が音楽好きだったので、小学生の時に二期会の「さまよえるオランダ人」を母に連れられて観に行きました。これが初めてのワーグナー体験です。照明を完全に落とした真っ暗な会場に音楽が流れている、というのが強烈な記憶です。

ーそれは鮮烈なワーグナーデビューをなさいましたね！それにしても「さまよえるオランダ人」とは洩いです(笑)。

中学生時代は、学校近くの区立図書館にクラシックレコードがたくさん所蔵されていて、毎週山のようにレコードを借りては家で貪り聴いていました。交響曲や管弦楽より先にまず心惹かれたのは、J.シュトラウスの「こうもり」でした。なんて心をうきうきさせてくれる楽しい音楽なんだろうと思いました。だから順番としては僕を音楽に導いてくれたのは交響曲や管弦楽よりも先にオペラだったんですね。その流れで、次はワーグナーを聴いてみようとなりました。知識はゼロですから、友人に何を聴けばいいのか質問していたと思います。ワーグナーは勿論、オペラの主要な作品は全部聴きました。レコードを聴きながらよく寝てしまいました。気が付くとレコード針がぶつと音を立てていましたね。



16歳の時に東京文化会館で二期会がやった「タンホイザー」を観に行きました。この時はカーテンコールでブラヴォーも叫びましたよ。舞台のエネルギーに圧倒されました。「ニュルンベルクのマイスタージンガー」に出てくるオーボエのパッセージが本当に魅力的で、その部分をドイツの田舎の歌劇場のオーケストラで吹きたいと思いました。それがきっかけでオーボエを習ったりもしました。今こうして振り返ると、僕の音楽の原体験にはワーグナーが深く根ざしているんだと気付かされました。実は最近、あの頃の響きが懐かしくなって当時聴いていたLPレコードを改めて聴き直しているんです。

ー初めて何うお話ばかりで、大変興味深いです。それにしても幼少期からの先生の音楽体験の豊かさ、濃密さには驚くばかりです。早い時期からワーグナー作品に触れて、それが少なからず先生の人生に影響を及ぼしていた…と言うことでしょうか。

さて、そのワーグナーですけれどもね、彼のオペラを「楽劇」と呼ぶこともあります、それはどうしてなのでしょう？

楽劇という言葉はドイツのムントという作家が作った造語でこれを勝手にワーグナーのオペラに当てはめました。ワーグナー自身はこんな訳の分からない言葉で自分の作品を呼ぶのはやめて欲しいと言っています。楽劇とはドイツ語の「音楽的ドラマ」「音楽的劇」の省略です。

ワーグナーはもともと詩人を目指していたようで、他のオペラ作曲家とは違い台本も自作ですし、曲の発表よりも前に、台本を自分で読み上げる朗読会も開いていました。ともかくワーグナーのオペラを特別扱いにしたい、そう思った人達が「楽劇」と名付けたようです。

ーそうだったのです。私はまたワーグナー自身が差別化を図って自ら「楽劇」と呼び習わしていたのかと思っていました。さて、そのワーグナーのオペラですが、他の作曲家のそれと比べてもひととき「重厚長大」で「近寄りたくない」と、私などは勝手に思っていますが、本当にそうなのでしょう？

ワーグナー以前の作曲家のオペラは、小さな曲の集合体で曲と曲の間には区切りがありました。ところがワーグナーの場合、曲が途切れずに延々と繋がっています。「トリスタンとイゾルデ」になると1小節ごとの転調で旋律が無限に続けられるような仕掛けにもなっています。これが「重厚長大」で「近寄りたくない」に結びつくと思います。

可愛いアリアを1曲だけ聴きたいという希望はワーグナーに関しては難しそうです。

それとオペラは基本的に劇場で観るものです。もしくはテレビ画面などを通して舞台と一緒に音楽を聴いて観るものです。

これにCD,レコードだけで接するというのはかなり無理がありますね。昔はレコードでしたから、ワーグナーは5枚が当たり前で、その裏表をひっくり返しながらか聴くから大変でした。しかし僕が現実に体験して驚いたのは、劇場で観るワーグナーは長くなかったという事です。

「トリスタンとイゾルデ」は舞台での動きがほとんど無く、しかも上演時間が5時間近くありますが、あっという間に終わりました。いろいろな演奏で舞台を見ますが、毎回、実際に観ると短いなあ…と思うのです。やはりオペラは観て、聴いて楽しむものですね。



【バイロイト祝祭劇場】

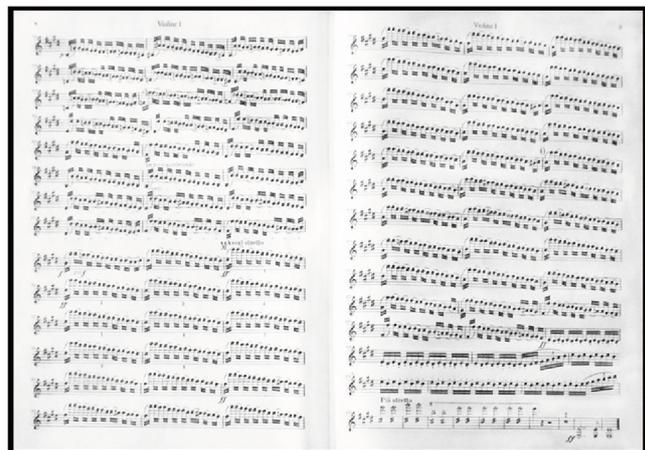
ワーグナーは作曲のみならず、劇の台本の執筆から実際の舞台装置の構想までトータルで手掛けた挙句、理想の劇場まで造ってしまいました。ワグネリアンの聖地として、現在でも毎夏、華々しく音楽祭が開催されています。

ー「楽劇」と並んで彼のオペラに特徴的な言葉に「ライトモチーフ」と言うものがあります。この「ライトモチーフ」について簡単に教えていただけますか？

ワーグナーは登場人物や特定の行為、感情にごく短い旋律を与えようという作曲技法を使いました。非常に短いので「旋律」ではなく「動機」と言う言い方がされます。

ワーグナーの代表作「ニーベルングの指環」は上演時間15時間の大作です。話の筋もそれなりに複雑です。これをワーグナーは「動機」を使って整理し作曲しようとしていたのです。

ー次々と繰り出される魅力的な音の洪水！といったワーグナーの作品は、実は演奏する側からするとかなり難易度が高いのです。#やbがたくさん付いた、細かく素早く動く音符達にずっと苦しめられます。「タンホイザー序曲」ではヴァイオリンの皆さんには、最後に延々3ページ半に及ぶ壮絶な戦いが待っています(笑)。指揮する側からは、ワーグナーはいかがですか？



「タンホイザー序曲」2nd Violinのラスト2ページの楽譜(1st もほぼ同じ)

「タンホイザー序曲」の終盤のヴァイオリンはものすごいですよね。僕はこの箇所スコアを見るといつも、ワーグナーの頭の中はどうなっているのかと思います。彼は英才教育を受けた楽器の名手ではなく独学で音楽の道に進んだ人です。そんな彼がなぜこんな細かく複雑な音符を書いていく事ができたのでしょうか？

ワーグナーの楽譜には実際に耳で聴き取れるよりも遙かに多くの音符が書かれています。その強弱のバランスを少し変えるだけで、全く違った世界が広がるのです。

ーそれにしても圧倒的な音符の数ですね。今回ばかりはヴァイオリンパートでなくて良かったとつくづく思いました(笑)。

—最後に、今更ですが先生はワーグナーの音楽はお好きですか？

厚響でタンホイザー、トリスタンとイゾルデの練習を終えてから数日は頭の中でいつもワーグナーが鳴っています。そして練習に行く前に準備をして…とこれを繰り返していますから頭の中にはいつもワーグナーが鳴っています。ワーグナーには人を虜にする毒や魔力がありますね。

—素敵で貴重なお話を本当にありがとうございました。最後の質問では、ちょっとはぐらかされてしまいましたか？（笑）ワーグナーの壮大な世界は、決してこんな短い時間で語り尽くせるものではありません。また後日、続きを期待してよろしいですか、マエストロ？

conductor **長野 力哉** Rikiya NAGANO

東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業。

指揮を小澤征爾、山田一雄、尾高忠明、の各氏に、ピアノを小森谷泉氏に、対位法を尾高惇忠氏にそれぞれ師事した。

1987年より西ベルリンに留学。

ベルリン芸術大学においてカール・ビュンテ教授に師事する一方、ベルリンフィルハーモニーのもとで87年から90年の間行われたすべてのリハーサル及びレコーディングに立ち会い、研鑽をつんだ。

東京都交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、北九州交響楽団、上野の森交響楽団、秦野市民交響楽団、千葉大学OBOGオーケストラ、新三友合唱団など数多くのオーケストラ、合唱を指揮。

2015年、2017年 ドイツのベルリン・ポツダムに於いて日本ブルックナー交響楽団の指揮。公演を成功に導いた。



## 2017年度 会計報告（会計年度は2017年4月1日～2018年3月31日）

【会員数】

種類	年会費（円）	人数（口数）	計（円）
Solo	2,500	18（19）	47,500
Duet	5,000	11	55,000
Concert	10,000	7	70,000
Symphony	30,000	1（2）	60,000
計	—	37人（39口）	232,500

【収入と支出】

収入（円）		支出（円）	
昨年度繰越金	16,919	郵送代	19,200
会費	232,500	事務用品	3,078
貯金利息	3	印刷費	11,346
		会員招待チケット代	96,000
		振込手数料	108
		交響楽団助成金	90,000
		慶弔費（弔電）	0
		次年度繰越金	29,690
計	249,422	計	249,422

厚木交響楽団友の会2017年度会計は、6月の定例役員会において、会計監査、承認されました。定期演奏会のチケット代金96,000円のほか、90,000円を団への助成金として、楽器の運搬用トラックの維持費、ガソリン代等に充てさせていただきました。皆様の温かいご支援に感謝申し上げます。ありがとうございました。

ここ数年、定期演奏会を一つ終える度に「新しい会員さん」をお迎えすることが出来、事務局としても大変嬉しく、有り難く思っております。残念ながら年度の区切りで退会される方もいらっしゃいますので、大幅増というわけには参りませんが、2018年8月現在で、Symphony 1名、Concert 7名、Duet 12名、Solo 21名の計41名の皆様にご支援いただいております。上の表の数字より少し伸びているのがおわかりいただけるかと思います。私どもの様なアマチュアのオーケストラに毎回足を運んでいただくばかりでなく、ご支援まで賜り、本当に身の引き締まる思いでございます。感謝の気持ちを演奏に替えて、皆様にお届けできる様にと願っています。

インペク【にしお】  
の  
つぶやき



第5回

## サッカー・ワールド・カップと音楽

もうずいぶん前のように感じますが、6月から7月にかけてサッカーのロシア・ワールドカップが開催され日本代表の活躍に寝不足になりながら一喜一憂しました。

サッカーの応援では、チャントといわれる応援歌で選手を応援する姿を目にします。チャントは選手個人向けのもの、チームのものなどいろいろありますが、日本代表の試合の

中継で最も耳にするのはヴェルディ作曲歌劇「アイダ」の＜凱旋行進曲＞のテーマ部ですね。この曲の何とも言えぬ高揚感と誰もが耳にしたことのある覚えやすいメロディが決め手なのでしょうが？  
同じように、テレビのサッカー中継ではよく有名なクラシック音楽の一部分が、放送のテーマやCMのための中継カットの際のつなぎの音楽として使われます。私の記憶によれば、「アイダ」の＜凱旋行進曲＞のほか、ワーグナーの「ニルンベルグのマイスターズinger」の第一幕前奏曲は本当によく耳にします。

今回のロシア・ワールドカップではどこかの放送局のワールドカップ情報番組でチャイコフスキーの大序曲＜1812年＞が使われていました。

チャイコフスキーの大序曲＜1812年＞について簡単に解説しますと、1812年のナポレオン軍のロシア遠征と敗北という歴史的な大事件を描いた曲。ロシア正教会の讃美歌、民謡、のちのフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」、ロシア国歌などなどを巧みに用いた描写音楽であり、ロシアの農村風景や、民兵軍とナポレオン軍の戦いのさまが生き生きと描写されています。  
冒頭はロシア正教会の聖歌が厳かにチェロとヴィオラで奏でられます「ロシアのどかな村にこだまする平和への祈り」。続いて緊迫感が高まり、ロシア軍の行進、フランス国歌が聞こえてきて戦闘の描写に突入。戦闘が小休止すると、一転して穏やかなロシア民謡風の主題が現れます。再びフランス国歌が聞こえてきて戦闘になりますが、ロシア軍の激しい抵抗に、最後は大砲も発射されて、フランス軍は大敗走…ロシアが勝利。雄々しい行進曲にロシア国歌も登場し、華々しく曲を閉じます。



歓喜のフランスチーム

(7月17日付 朝日新聞より)

決勝の中継を見てふと思いました。この放送局は、開催国ロシアの優勝に願いを込めて＜1812年＞を選曲したのかと。  
結果はロシアは奇跡の大活躍はしたもののベスト8で敗れ、フランスが優勝したのでした。名曲通りの結果だったらどんなに凄いことでしたでしょう…  
フランス優勝おめでとう!!



## 2018年度 市民芸術祭

2018年12月16日(日)  
会場/厚木市文化会館 大ホール  
指揮/柴田 真郁 厚木市民による合唱団  
ベートーヴェン 交響曲第9番 二短調  
作品 125「合唱付き」ほか

●チケットが発売になり次第、事務局が購入して皆様にお届けします。



## 第82回 定期演奏会

2019年4月21日(日)  
会場/厚木市文化会館 大ホール  
指揮/長野 力哉  
スメタナ 「売られた花嫁」序曲  
「我が祖国」全曲

●有名な「モルダウ」を含む「我が祖国」全曲を演奏いたします。

事務局より

今年も南毛利公民館のご協力で、学級講座「生演奏を聴いてみよう！」が開催されます。厚木市民の方ならどなたでも受講できますので、その詳しいご案内を同封させていただきます。今回の指揮者 長野力哉先生のお話を直に聞くことができます。興味のある方はぜひ、南毛利公民館までご応募下さい。

厚木交響楽団はかつて杉並区民オペラに協力する形で、5年連続でオペラの名作に関わらせていただきました。「カルメン」「椿姫」「アイダ」等、どれも素晴らしく、どれも難しかったです(笑)。それでもワーグナーのオペラはいろんな意味で別格と申しましょうか、とてもとても素人が手を出せるものではなく、今回のプログラムの3曲も大変に手強いのです。ただ、どの楽器にとっても大変にやりがいがあり、またその旋律の美しさに魅了されます。「ローエングリンの結婚行進曲」「ワルキューレの騎行」など、ワーグナーの作とは知らずともすっかり馴染みになっている曲も多いのです。今回のプログラムもきくと、どこかで聞いたことがあるなあと思われるに違いありません。

9月9日、まだ暑さは残っているかもしれませんが、長野マエストロのワーグナーとブラームスをぜひ聴きにいらして下さいませ。いつもの厚木市文化会館にて、お待ち申し上げております。

(事務局 岡田史子)